賢人に在す。豈聖人を用いずして徒に他国の逼を憂えんや。抑大覚世尊、遥かに末法闘諍堅固の時を鑑み、此の如き大難を対治すべきの秘術を説き置かせらるるの経文明明たり。然りと雖も如来滅後二千二百廿余年の間、身毒・尸那・扶桑等一閻浮提の内に未だ流布せず。随いて四依の大士は内に鑑みて説かず。天台・伝教も而も演べず。時未だ至らざるの故なり。法華経に云く、「後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布す」云云。天台大師云く、「後五百歳」。妙楽云く、「五五百歳」。伝教大師云く、「代を語れば則ち像の終り末の初め、地を尋ぬれば唐の東羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生闘諍の時なり」云云。東勝西負の明文なり。法主聖人、時を知り、国を知り、法を知り、機を知りて、君の為、民の為、神の為、仏の為に、災難を対治せらるべきの由、勘え申すと雖も、御信用無きの上、剰え謗法の人等の讒言に依りて、聖人頭に疵を負い、左手を打ち折らるるの上、両度まで遠流の責を蒙り、門弟等も所所に射殺され、切り殺され、殺害・刃傷・禁獄・流罪・打擲・擯出・罵詈等の大難、勝て計るべからず。茲に因りて大日本国皆法華経の大怨敵と成り、万民悉く一闡提の人と為るの故に、天神国を捨て、地神所を辞し、天下静かならざるの由、粗伝承するの間、其の仁に非ずと雖も、愚案を顧みず言上せしむる所なり。外経に云く、「奸人朝に在れば賢者進まず」云云。内経に云く、「法を壊る者を見て責めざる者は仏法の中の怨なり」云云。又風聞の如くんば、高僧等を崛請して蒙古国を調伏すと云云。其の状を見聞するに、去ぬる元暦・承久の両帝、叡山の座主・東寺・御室・七大寺・薗城寺等の検校・長吏等の諸の真言師を請い向け、内裏の紫震殿にして故源右将軍並に故平右虎牙を呪詛し奉れる日記なり。此の法を修する